＜実践報告＞

メディアを利用したコミュニケーション教育

徳井厚子　　信州大学教育学部言語教育講座

Communication Education Using Media

TOKUI Atsuko: Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	メディアを利用したコミュニケーション教育
キーワード	映像メディア　アクティブオーディエンス　コミュニケーション能力 メディアリテラシー
実践の目的	コミュニケーション論
実践者名	徳井厚子
対象者	信州大学教育学部生（150名）
実践期間	2008年10月～12月
実践研究の方法と経過	当授業は，映像（ジブリ作品）を利用したコミュニケーション教育の実践報告である．メディアを能動的に読み取るアクティブオーディエンスの立場にたつことにより，映像を視聴しコミュニケーション能力を高めることを目的とし実践を行なった． 具体的には，世代を問わず人気を集めているジブリ作品からトトロを選び，その中で大人の子供に対するコミュニケーションの仕方に焦点をあて，視聴を行なった．視聴の後，ふりかえりシートをグループで共有した．
実践から得られた知見・提言	ふりかえりの気づきからは，コミュニケーションの重要な側面である共感，判断留保等の気づきが読み取れた．また，傾聴，非言語的側面に関する気づきも見られた．アクティブオーディエンスになることによってコミュニケーション意識が向上したということがいえる．焦点を定め，問いをたてることによってアクティブオーディエンスとしてメディアを能動的に読み取ることができたといえる． 映像を利用したコミュニケーション教育では，題材選び，焦点化，ふりかえりの共有が重要であることが示唆された．

1．実践の目的—メディアリテラシーとコミュニケーション教育

学校教員養成の現場は，生徒間，教員間，保護者と教員間等さまざまなレベルにおけるコミュニケーションの場である．教員養成においてコミュニケーション能力を育成していくことは重要な課題の一つといえるだろう．本稿では，コミュニケーションをダイナミックで双方向性があり，プロセスであると捉えた上で，教員養成課程の授業で行なった映像を用いたコミュニケーション教育の実践を紹介することを目的とする（注１）．

まず，本実践のキーコンセプトであるメディアリテラシーについてコミュニケーション教育との関わりから論じたい．

鈴木(2004)は，メディアリテラシーの取り組みとして「メディアによって情報の一方向的な受け手とされてきたオーディエンスをメディアの『能動的な読み手』として位置づけることが出発点である」と捉えている．鈴木(2004)は「オーディエンスが意味を読み取る」としているが，メディアを送り手から受け手への一方向的な関係として捉えるのではなく，メディアの受け手を主体的かつ能動的な読み手として意味づけ「それぞれが持っている経験，ニーズなど，様々な要素を持ち込みながらテクストを解釈し，アクティブにメディアを読んでいる」（鈴木，2004）としている．鈴木（2004）が主張するように，アクティブにメディアを読むという捉え方はメディアリテラシーの育成のためには重要な捉え方であると考える．同時に，アクティブなオーディエンスを育成していくことは重要であると考える．

そこで，本実践では，アクティブオーディエンスとしてメディアを能動的に読み取ることにより，コミュニケーション能力の育成を目指した実践を行なうこととした．具体的には，映像メディアにおける登場人物のやりとりをアクティブに読み取ることにより，コミュニケーション能力を育成することを目的としている．なお，使用する映像メディアとしては，視聴者に人気の高いジブリ作品を選んだ．その理由としては，世代を問わず人気の高い理由の一つとして，登場人物同士のやりとりが挙げられると考えたからである．登場人物のコミュニケーションそのものをアクティブに読み取ることがコミュニケーション能力の育成に結びつくのではないかと筆者は考えた．

2．実践の方法

実践の方法は以下の通りである．なお，本実践は，教育学部一年生対象「コミュニケーション論」の授業で行なった．受講生は約 150 名である．

コミュニケーション論の授業では，理論，実践を通して教師にとって必要なコミュニケーション能力を高めることを目的としている．具体的な内容は，自己開示，アイデンティティとコミュニケーション，非言語コミュニケーション，対人コミュニケーション，スモールグループコミュニケーション，支援のコミュニケーションについて理論，実践を通して学ぶ内容となっている．

本実践報告で報告する実践は「対人コミュニケーション」をテーマとした授業の中で具

体的な対人コミュニケーションにおける具体的なやりとりをメディアを通して学ぶということを目的としている.

具体的には，ジブリ作品の中で「トトロ」における父親と子どもとのやりとりに焦点をあて，特に父親のコミュニケーションがどのように行なわれているかに注目して最初の１５分間のビデオ視聴を行なった.

視聴した場面は，新しい家に引っ越してきた父親と娘がやりとりをしながら新しい家の中を見たり，掃除をしたりする場面である．具体的には，これらの場面で子供が発見したり，驚いたり，あるいは子供に掃除をさせる際など父親が子供に様々な形で子供の発見や驚きを受けとめたり，すすんで掃除をさせようとしている．父親の声のかけかたを緻密に観察することで，どのように子供とコミュニケーションをとっているのか，そのコミュニケーションから学ぶことはあるかについて観察をすることを課題とした．具体的には「トトロは子供から大人に至るまで多くの世代に支持され，人気を集めているが，その人気の秘密はどこにあるのか．特に登場人物の中の父親の，子供への声のかけかたに焦点をあててコミュニケーションについて緻密に観察する」ということを課題とした．前章で述べた通り，視聴者自身がアクティブオーディエンスとなり，メディアを能動的に読み取るということを目的としている.

授業では，ビデオを視聴し，気づいたことをそれぞれ書き出し，グループで共有するという方法をとった.

３．学生の気づきから

学生の気づきは様々な観点からの気づきが見られた．以下では学生の気づきを挙げてみたい.

【共感という観点から】

トトロは今日でも大人気の作品だが，コミュニケーションの観点から見ると共感をよぶ裏付けがなされている．子供心をくすぐるし，冒険したくなるような内容だ．お父さんの話し方も優しくて何気ない会話だけどたった一言で子供を喜ばせている．聞く人を楽しませるような話し方.

ここでは共感という観点に焦点をあてた気づきを書いている．今回は特に父親の子供への話し方に焦点をあてたが，相手を楽しませたり，喜ばせる話し方の必要性についての気づきが見られる.

子供たちはこのトトロの作品の中に自分をおいて自分もこの作品の一登場人物のように感じているのだと思う．その中で，こう父と関係したら，こんな姉妹がいたらと感じるからだと思った.

ここではオーディエンスが登場人物に共感できるという点を挙げている．映像の世界が切り離された世界ではなく，視聴者と一体感をもって感じさせることができるということへの気づきが述べられている．

【判断留保という観点から】

お父さんはメイの言うことに対して大人の判断をむやみに押し付けずに子供の視点で子供にもわかるように説明してあげていました．ジブリ作品は子供の感性や発見をすごく大事に描いていてそれを周りの大人も否定せずあたたかく見守っているところがとても優しくてあたたかい作品のイメージにつながっているのかと感じました．

父親のコミュニケーションが「判断を留保している」ということへの気づきが見られた．「周りの大人」の「相手を否定していない」コミュニケーションがこの作品のあたたかいイメージにつながっているという気づきが見られた．

天井からどんぐりが落ちてきたとき，「ありえない」と決めつけるのではなく「リスかな」と判断を留保していた．子供にしてほしいことを言うのではなく「自分はこう感じているんだよ」ということを伝えて子供自身に考えさせているのかと思った．

ここでは判断留保のコミュニケーションへの気づきを挙げている．大人の世界でありえないことを判断せずに留保したやりとりが見られたことへの気づきである．

【相手を否定しないという観点から】

トトロが子供に人気があるのは，登場人物の大人達が子供を頭から否定することがないからだと思いました．不思議な現象がおこっても「そんなはずはない」と決めつけず，話にのってくるのが子供が見ててよいなと思う場面だと思います．何かしてほしいときも自分で考えるように促しているのがすごいと思いました．

この気づきも「相手を否定しない」「決めつけない」ということの重要性を挙げている．また相手に命令せず自分で考えるよう促しているコミュニケーションへの気づきも見られた．

怒っているシーンがなかった．何かいるよと言っていたときもどうしてなぜと聞くことはせず，リスでもいるのかな？と聞いていた．窓を開けられない時も邪魔とは言わず，開けられないじゃないかと優しい言い回しであった．このような子供を否定しないことが子供に良い印象を与えるのではないかと思った．

怒っているシーンや相手を責めるような言い方ではなく，相手を否定しない言い方をしていることがオーディエンスである子供に良い印象を与えているのではないかという気づきがあった．

【傾聴という観点から】

私自身話すことには責任があると感じていましたが，聞くことにも責任を持つべきなんだと知りました．

話すことだけではなく，責任をもって聞くということについての気づきがみられた．

大人の傾聴の姿勢が目立っていた．どんぐりなども「そんなの放っておきなさい」といった否定的な言葉で片付けたりすることはなく，会話もユーモアのある方向へ大人がもっていっているように思った．ジブリの作品がこんなに人気がある理由として子供なら誰もが知りたい質問に大人がしっかりとわかるように答えてくれることや子供の小さな発見を「そんなこと」と片付けずにまるで宝物のような大きいものをみつけたかのように認め，共感してくれる大人の態度といったものが挙げられると思う．怒るのではなくまず話を聞き，肯定的な言葉を大人がかけるから，子供は自分がさつきやめいになった気持ちでトトロを見ることができるのだと思う．

傾聴のコミュニケーションについての気づきがここでも見られている．ここでは「否定的な言葉で片付けるのではない」「子供の発見を宝物のように認めている」という具体的な傾聴の態度についての気づきが書かれている．

【命令口調ではないという観点から】

2回目に話し合ったとき，「柔らかいかんじ」と言った人がいました．なんでやわらかいのだろうと考えてみると命令口調を使わないことや大人が判断しないところなど子供の考えや見たことをお父さんが尊重しているからだろうと思いました．

ここでは，命令口調を使わないという観点への気づきが見られた．命令口調を使わないことが「やわらかい印象」につながっているのではないかという気づきである．また子供の考えを尊重することがやわらかさにつながっているという気づきも見られた．

「2 階に行ける階段を探して二階の窓を開けてきましょう」と課題，それも子供が楽しく挑戦できるものを設定して見ている私たちもわくわくさせる．

子供に掃除をさせたいときに，命令せずに「2 階の階段をさがす」という課題を出し，子供に挑戦させるというコミュニケーションをとっていることを指摘している．

【開かれた質問という観点から】

トトロが子供に好かれるのは，話の展開や会話の内容がわかりやすく，子供の好奇心を刺激するような内容が含まれているからだと思う．質問には open question が多いし，回答にも想像が膨らむようなものが多いので子供は見ていて楽しいのだと思った．

大人の質問に開かれた質問が多いということへの気づきが見られた．開かれた質問を使

うことで，想像を膨らませるような応答が可能になるということに考察を深めている．

【非言語コミュニケーションという観点から】

ジブリ作品が子供，大人に共感を与えるのは，まず登場人物みんなが個性的でにこにこ笑っていて楽しそうという点が挙げられると思います．悪役にも味があるのがジブリの特徴だと思います．笑顔は笑顔を引き出します．

登場人物の表情に焦点をあてた気づきである．登場人物が笑顔であるということに気づき，この笑顔がオーディエンスの笑顔を引き出すのではないかという考察につなげている．

4．気づきから見えてくるコミュニケーション意識

では，学生の気づきからはコミュニケーション意識の変化がどのように見えてくるだろうか．

まず，学生の気づきからは，共感，判断留保といった対人レベルでのコミュニケーションにおける重要なキーワードに関する気づきが見られたことが挙げられる．相手に共感する話し方，判断を即座にせずに留保しながら聴くということは，教育現場においても重要である．渡辺(2002)は，判断留保について「自らが認識しているものや事象が自らと離れて客観的に存在していると考えず，その認識を絶えず括弧の中に入れ，より慎重に知ろうとする認識」であると述べている．自分の認識や思い込みで判断してしまうのではなく，留保して相手を慎重に知ろうとすることは教育現場において生徒と向き合う時にも重要であろう．映像作品に登場する父親は，自らの判断を留保させながら子供と向き合っている様子がコミュニケーションからうかがえるが，このことについて映像から読み取ることができた気づきがいくつか見られた．

また，判断留保とも近い気づきであるが「相手を否定しない」コミュニケーションであるということへの気づきも見られた．子供と向き合うときに，相手を否定せず受け入れることの重要さを登場人物のコミュニケーションから学んだといえる．

命令口調ではないコミュニケーション，開かれた質問の仕方という具体的なコミュニケーションの仕方への気づきも見られた．子供に命令すると「命令する者／される者」という関係が生じてしまう．そのような関係ではなく，大人が子供に課題を出し，子供がそれに取り組むというコミュニケーションにすることによって，より子供が主体的に手伝いをするように促すことができる．アクティブに映像を読み取ることによって子供がより主体的に動くことのできるコミュニケーションについて気づきが見られたといえる．このコミュニケーションは教育現場においても重要であろう．また，開かれた質問が使われていることへの気づきも見られた．閉ざされた質問の場合は，相手が話したいことを話せなくなってしまうが，開かれた質問の場合は想像力を深めることができ，相手が自由に話したいことを話すことができるようになる．開かれた質問をして相手が自由に話すことのできる

雰囲気をつくっていくことは教育現場でも重要であるが，このような気づきが見られたことも注目すべきだろう．

また，「話し方」だけではなく，「聴き方」に着目した気づきも見られた．「責任を持った聴き方をする」ことについての気づきが見られたが，聴くことについて責任を持つことが必要であるという気づきは相手に真摯に向き合うために基本的かつ重要なことであり，教育現場においても重要であるといえる．

さらに，言語コミュニケーションだけではなく非言語についての気づきも見られた．顔の表情に着目した気づきが見られたが，この点に注目した気づきも教育現場においても重要といえるだろう．

このように，様々な点からの気づきが見られたが，アクティブに映像を読み取ることにより，コミュニケーション意識が向上したともいえる．

5．まとめと今後の課題

以上本報告では，メディアを能動的に読み取ることにより，コミュニケーション能力を育成するための実践について報告した．

本報告では，まだ実践の途上ではあり，課題は残されているが，学生のふりかえりシートから，メディアをアクティブに読み取ることにより，コミュニケーション能力を高めることができたのではないかといえる．

メディアを利用したメディアリテラシーのためのコミュニケーション教育についての今後の課題を以下に幾つか挙げる．

まず，メディアを利用する際に，重要なのは題材の選択である．今回は「世代を問わず多く受け入れられ，人気が高い作品」を選んだ．広く受け入れられている作品には，登場人物のコミュニケーションの仕方という観点においても人々に受け入れられ，好感を持たれる理由が存在しているからではないかと考えたのが一つの理由である．今後は様々なメディアを目的に応じてどのように工夫し利用するかを考えていきたいと思っている．

また，焦点の定め方も重要であると考える．今回は作品の中で特に大人のコミュニケーションに示唆する点が大きいのではないかと考え，視聴する場面として大人の子供に対するコミュニケーションに焦点を当てた．メディアを利用する際，焦点を定めた観察をした方が深い読みをすることができるのではないかと考える．同時にアクディブオーディエンスとなるためには「問いをもって見る」ことも重要であるといえる．今回は「なぜこの作品に人気があるのか，コミュニケーションの観点から考えてみる」という問いをたてた．問いをたて，焦点化したことによってアクティブオーディエンスという立場に立てたのではないかと考える．アクティブオーディエンスとなるためには，焦点化とともに問いをたて，視聴していくということが重要であろう．

また気づきを深めるために，参加者同士が意見や気づきを共有する場を提供するということも重要である．メディアを題材とする授業はともすればメディアから視聴者の一方向

となる傾向がある．しかし，視聴者同士が気づきを共有することによって双方の気づきを深めることが可能になる．その意味で，メディアを利用した授業では，参加者同士の気づきを共有する段階は学びを深める意味でも重要であると考える．個々がアクティブオーディエンスとなるだけではなく，自分自身の視聴の仕方も相対化することが可能になろう．今後はこうしたふりかえりの仕方も工夫したいと考えている．

今回は，アクティブオーディエンスという観点からメディアを利用したコミュニケーション教育の一実践を紹介した．今回はまだ一実践であるが，今後様々なメディアを活用したコミュニケーション教育を行なっていきたいと考えている．

注

1　なお，塚本(2006)は，特に異文化間教育の分野においてメディアを利用している授業の担当科目について全国レベルで調査を行なっているが，多い順に比較教育学（37 件），コミュニケーション(27 件)，異文化間教育(13 件)が挙げられている．また種類としては，テレビ番組が多数を占め，それ以外として映画，インターネット，本，漫画等が挙げられている．

文献

鈴木みどり編著，2004，メディア・リテラシーを学ぶ人のために，世界思想社

塚本美恵子，2006，「利用メディアの調査」からみた異文化間教育の現在，異文化間教育，23，アカデミア出版会

渡辺文夫，2002，異文化と関わる心理学，サイエンス社

(2009 年 6 月 24 日　受付)